

ニューデリーにて

2005年11月12日から15日までアジア弁理士会（APAA）の国際会議に出席のためにニューデリーを訪れた。その際、インド特許庁、地元の高等学校、IT企業、タージマハル等を訪問した。わずかの期間の経験でしかなかったが、感じたことを次に紹介したい。

◆街中にて

ニューデリーはインドの首都、人口1300万人の大都会である。英国植民地時代に作られた都市だけあって道路は整然と区画され、壮大な敷地内に植民地時代に作られた大きな建物が残されている。ダウンタウンを除き、道路の両脇には巨大な街路樹が四方に枝を張り、暑い日差しを遮っている。道路の両側にはさらに小公園のような空き地が続き、その先に建物の塀が作られているので、森林の中に道路が延びているようなゆったりした感じがする。

しかし、道路の舗装は悪く、リキシャと呼ばれる三輪自転車、トゥクトゥクと呼ばれる三輪自動車、小型自動車、普通の自動車、大型のバスまで大小さまざまな車がひしめき合いながら走っている。交通信号は比較的少ないので、交差点で車は人や小型車を掻き分けながら一寸刻みで進行する。

ダウンタウンに来ると道の両側には今にも潰れそうな家に椅子を2～3脚並べた食べ物屋、粗雑な雑貨を並べた店などが連なっている。所々に露天の床屋さんが街路樹に鏡を吊るし椅子一つで営業していた。時たま、誰も手綱をとらない牛が単独で車道わきをゆったりと歩いている。このようなこじき小屋の軒先に新車の小型自動車が置いてあったのも妙にアンバランスであった。

一方、学校や公共施設、高級住宅地等

は大きな敷地の周りに高い塀を巡らし、出入り口には踏切の遮断機のようなゲートが設けられ、ガードマンが厳重に警戒している。

最終日にインドの特許庁を訪問した。郊外の新開地に新しくできた庁舎は明るいレンガ色をした極めてモダンな建物で、できたばかりで一部の部屋はまだ内装中であった。



インド特許庁



インド特許庁の受付

この新開地はニューデリーの南方に位置し、見渡す限り民家が見当たらない広々とした草原の中に新しい道路と高架の鉄道路線が新設され、所々に集合住宅が多数建設されていた。特許庁は其の道路にそって、ボツンと1つだけ建てられていた。

このように、新旧、貧富がごちゃ混ぜ

になって経済発展しているのが今のインドの姿であろうか。

◆インドの教育事情

初日は暇があったので、インドの中・高等学校を訪れた。ニューデリーの中心部にあり中産階級の子弟の通う学校である。朝 9 時ころ訪れたら丁度朝礼をしていた。高校生と思われる生徒が整列して国歌を斉唱していた。この国歌は 1935 年インドの独立前に作られたものである。女の校長先生の訓示に続き、女生徒がスピーチを始めた。整列した生徒達は大人しく聞いていた。自分の考えを人前で述べる実地訓練の一つであって、毎日順繰りに 2~3 人の生徒がスピーチすること。



高等学校の校舎



毎朝校庭で行われる朝礼

その後、教頭先生が各教室を案内して

くれた。ある教室の壁に "I don't teach. I create children's conditions to learn ..." という額が飾ってあった。校長先生の話によれば、教育とは知識を教えるのではなくて、何か覚えたいという意欲を子供たちが自発的に持つように指導することである。



教頭先生の訓辞



女の校長先生

教室内ではきちっと決まりを守らせるが、一旦教室をでれば学校内でも自由に行動させている。レンガ建ての校舎の堀を利用して男女の学生がロープを使ったロッククライミングの練習を勝手にしていたのは驚きである。そのせいか子供たちは実に良い目をしていて、生き生きとして人の心を引き込むような美しい目であった。

インドでは今まで文盲率が 70% と高

かったが、1998年に初めて小学5年、中学5年の義務教育（地方では貧しい人には無料、都市では若干月謝をとる）を導入した。同時に、14～50歳の女性に読み書きを教えて、文盲の人を無くそうとインド政府が力を入れている。なぜ女性かというと、女性は家にいるので女性に字を教えれば自然に子供達も字を覚え学校に行く率が高くなるということである。

学校教育では、特に数学に力をいれ、小学校卒業時には 15×15 の暗算が、中学卒業時には 99×99 の暗算が出来るようにする。そして中学卒業時に主要科目の平均点が80点以上の生徒は科学系の学校に、40点以下のものは文芸系の学校へと、勿論本人の希望も含めて進路が決められるとのこと。その後の高校は2年、大学は3年である。

また、インドの最大の問題はカースト制であるが、政府はその解消を図るための政策の一つとして、下層階級の子には5点おまけして、なるべく良い学校に入れるようにしているとのこと。



生徒による寄付金の募集

◆IT 産業

インドでは IT 産業が急速に伸びている。その現場を見学するために、ニューデリーの市内にある ESPIRE という会社を訪問した。この会社、1946年に創

設された Rai グループというソフトウェア、学校、病院その他の生産業を含む国際的な企業集団である。ESPIRE は米国、日本、英国等100以上の大手会社のアウトソーシングによるソフトウェアの開発、メンテナンスを行っている。Rai 大学と同じ建物に同居していて、ユーザー毎に細かく仕切られたブースには SE やプログラマーが24時間体制でオンラインによって各企業のソフトの開発やヘルプディスクを行っている。英語を公用語とし、数学に強い若手技術者を多数擁するインドが世界中のソフトを独占する日はそう遠くないと若い社長が自信に満ちた顔で説明してくれた。



Rai 大学内にソフトウェアの会社が同居している

◆輝けるインド文明の粋・タージ マハル

総会のエクスカーションとしてタージ・マハルを訪れた。朝5時半にホテルのフロントに集合、バスに乗って20分ほど走って場末の駅みたいなサフジャルジャン駅に着く。5両編成の列車が待っていた。日本の田舎の汽車と同じ程度のあまり上等とはいえないが一応貸し切りの急行。ディーゼル車だ。7時頃やっと動き出した。全てがインド時間でのんびりしている。暫くして朝飯の弁当が配られた。チキンを主にし、一応サラダやフルーツそれにコーヒーが付いてますま

す。ディーゼル車はフルスピードでガタゴト走って10時頃アグラ駅に着く。

駅の改札を出ると絨毯が敷かれ、その両側のプラスチックバンドが我々を大歓迎してくれた。しかし、その後ろには自動小銃を持った兵士が警護にあたっている。

出発前に配られたパンフレットには、マッチ、ライター、携帯電話、たばこ、酒、食べ物、電子機器、ナイフ等全て持ち込み禁止とあり、最近起こったカシミール騒動の余波と思われる。

我々のグループはまずアグラ城に向かう。入り口で身体検査されて、城内に入る。20米の高さの褐色の煉瓦の城壁に囲まれ、城内には宮殿の他バザール、モスク、宮殿に働く人の住居まである。宮殿は殆ど大理石造りで、壁を二重にして水を通す水冷設備まで備えている。大理石の壁面には精巧な色石の象眼細工が施されている。この城の建設に10年の歳月を要したという贅沢な建物である。



アグラ城

アグラ城からタージ・マハルまではバスで移動し、最後はロバの幌馬車のサービス付き。ところが幌が壊れかけていて乗っている我々が必死に支えながら、意外と早いロバの駆け足に感心していた。

タージ・マハルはムガル帝国第5代王帝シャー・ジャハンが妻の死を悼み22年の歳月をかけて造った霊廟で、シンメ

トリックに造られた水路を持つ庭園の彼方に4本の尖塔とその中央にそびえ立つ70米の真っ白なドームを戴く建物は人の目を見張る美しさであった。

靴を脱がされて入った中央の大きな部屋には棺が2つ並べられていた。実際の棺は地下室にあり、大理石の棺にはレリーフの唐草模様が施され世界各地から集められた宝石が鏤められているとのこと。



タージマハル

先日、訪れた国立博物館に納められた数々の遺品といい、タージ・マハル等の遺跡を見るにつけ、17世紀におけるインド文化の素晴らしさは、遙か東方の小島の日本人にとっては正に唐天竺であってこの世の物とも思えなかったに違いない。

◆インド人

インド人は比較的穏和な人が多いみたいである。2度ほど自動車事故を目撃したがお互いに罵り合うことなく警官立会いの上で冷静に話し合っていた。中国の場合と大違いである。

街中で我々を見かけると笑顔を見せる人が多く、日本に好意を持っている人が多いようだ。我々のガイド（30代の男性）もイギリス人は嫌いではないが、日本人はインドの独立を助けてくれた恩人であると、また、買い物に入った店では、若い店員が握手を求めてきて日本人は

我々の友達であると云った。2人とも日本人を相手に商売をしているので、お世辞かもしれないが何となく気持ちが通じ合うのを感じた。

今回の旅行はセキュリティの問題で自由に街中を歩くことができなかったのも、極めて限られた見聞しか得られなかった。しかし、インドは将来、日本にとっては経済的にも政治的にも無くてはならない国になるのではないかという予感を強くした。

最後にインドを出国する際、ニューデリー空港の電子掲示板に空港所長の名前で“Don't pay Bribe（賄賂を払うな）”という警告が出ていたのもいかにもインドらしく、その実情を垣間見た気がした。



代表弁理士川島 順（APAA会員）
はやぶさ国際特許事務所



インド舞踊



道化師と私



道化師の行進



ニューデリー市内の寺院にて